

## 三字熟語④三大祭

企業経営漫談士 岡野実空

日本「三大祭」は、京都の祇園祭、大阪の天神祭、そして東京の神田祭。しかしここで取り上げるのは、「ノーベル賞」「先進国サミット」「オリンピック/パラリンピック」という、我が国の「三大国際祭」。今回は政治・経済・文化に跨る3つの祭をつじ、私たちの自画像を見つめます。

### その1: ノーベル賞

ダイナマイトや無煙火薬の発明などで巨万の富を築いたノーベル。その遺言と基金により、20世紀の幕開けに設けられたスウェーデンの国際賞。当初の物理学・化学・生理学医学・文学・平和の5分野に、1969年から経済学賞が加わり、毎年12月10日の氏の命日に、各分野で顕著な功績を残した人や団体にストックホルムで授賞式が行われます。

さてその我が国初受賞は1949年、物理学者の故湯川秀樹氏。それは我が民族が、敗戦から自信を取り戻す一つのきっかけとなりました。またその後の発展に伴って受賞者が増えるにつれ、毎年末に常軌を逸した報道合戦が繰り返されています。

しかしその本質は、過去の偉業の追認イベント。いま我が国は国別で7位の受賞者数を誇るとはいえ、過半は戦後の経済成長を背景にしたもの。しかも受賞者が男ばかりであることを見るにつれ、平成以降、ヒトへ長期投資を怠った結果は、今後徐々に逆の形で証明されて行くことになりそうです。

### その2: 先進国サミット

1975年にフランスの呼びかけで始まった、先進国首脳会議。それは当時の米英日独伊・5大国によるオイルショック後の経済対策が議題でしたが、そこに各国の誇りや政治的な思惑などが絡み、G6(+加)~8(土露)の間を行きつ戻りつして、今日のG7に引き継がれています。

またその間、新興国の台頭により、当初GDPで過半を占めていたG7の影響力は低下し続け、いまや中国やインド、ブラジルなどを加えたG20の幹事会的な存在になっています。そのため毎年回り持ちの国と開催地ばかりが話題となり、内容的にはあまり期待されない恒例行事になりました。

そんな中、アジア唯一の幹事会メンバーの日本。特に国内で開催される際の張り切り方は尋常でなく、我が国首脳の意識がまだ「脱亜入欧」にあることを、7年毎に痛感させられます。

### 「三々な経営」

E-11 「150」という限界の数字

### 「四字熟語」で考える経営戦略

Y-02 「外部環境」を考える・その1

Y-03 「外部環境」を考える・その2

### その3: オリンピック/パラリンピック

古代ギリシャを参考に、1896年アテネで始まった近代オリンピック。その後、冬季大会、パラリンピックが加わり、年中行事に近づきつつあります。

賛否両論が渦巻く中、1年遅れで開催されたTOKYO2020。それはすでに「商業化」というレベルを超え、すでにグローバルな「巨大産業」。コロナ禍にもかかわらず、公衆衛生の「史上最大の人体実験」が我が首都圏中心に実施され、その産業力の強大さが露骨に証明されることになりました。

また前回の東京大会との比較も含め、すでにさまざまな総括が始まっていますが、決して忘れてならないのは、1964年直後の不況対策として発行された国債(赤字、建設)。その後、半世紀を超えて何かにつけ発行され続けた結果、その限界が刻々と近づいているという現実です。そんな中、「少子化対策」「地方創生」という国家政策と矛盾するイベントを、子孫たちへのツケ回しで行ったことは、今後「世紀の愚行」として語り継がれるでしょう。

さて以上のような行事を、先進国の仲間入りの証として採算度外視で行った時代は、はるか昔に終了。そこから得られたさまざま教訓を活かし、自国ばかりでなく、先の大戦で大きな迷惑をかけた諸国と連帯して、欧米とは異なる、「アジア」ブランドを作り上げることこそ私たちの使命です。

そこに必要なのは、アジア「三大祭」。コンセプトは「一帯一路」ではなく、『三帯三路』です。

2021年8月16日 実空